

水仙の香に居ならぶや夷講

百八の馬も通るや鉢たゝき

節季候の手拍子に咲け梅の花

(菊の香、芭蕉袖草紙、七部集、篇突、俳諧近古類題集、韻塞、東華集、

笈日記、有磯海、續有磯海、皮籠摺)

文 章

泊船集序の一節

黄門定家の卿の曰、俳諧と申體は利口なり、ものを欺きたる心なるべし、心なきものに心をつけ、物いはぬものに物をいはせ、利口したる姿なるべし、とは俳諧といふ字を滑稽よりして註し給へるものにして、今の正風體に異り、滑稽は管仲、楚國に行いて、楚人に答へしが加し、本朝にも一休和尚の人に交れる類ならむかし、是は人に相あたる答辯の上においての俳諧にして、所謂利口なり、今世に俳諧と専らいへるものは只敷島の上においてのみなり、俳諧の心は萬の道萬の業にも通うて

風

有りぬべし、貫之の俳諧歌と歌の字を添へて書けるもこの故なるべし、

(泊船集)

第四項 言 論

出る儘

句は出る儘なるをよしとす、これを以て斧を以て正するは、却て低みに落つ、(俳諧問答)

第五項 批 評

許 六

風國、發句血脈の筋たしかに見届け難し、雨中の花の泥を上げたるが如し、風雅は客なるがよしと思へるにや、かたの如く庵末なり、然れども俳諧の卷には花實ともにあつて、しかも取りはやくしも見えたり、元來俳諧血脈に氣がつきたりとも見ゆれども、發句なければ詮なし、たとへば時代物の硯の蓋の無きを、今様の新物の蓋を取合はせたるが如し、

(俳諧問答)

第三十六章 總括

第一項 蕉風の歴史

芭蕉以前の萌芽

正風體(正風とも蕉風とも記す)といへる姿は桃青これを廣むといへども、これより先に正章既にその端を開けり、されば支考も貞室がことをこの老人は俳諧の中興にして芳野山に花を詠じ隅田川に鳥を吟ず、當時正風の祖といふべし、(嬉遊笑覽)

又問、俳諧無古人、此語甚過當なるに似たり、別に心ありや、庵主答、此語古人の句多しと雖、後人の手本にもなるべき言の葉のなき事を嘆息し給ふなり、古人をなみする心にあらず、其故は貞徳の時俳諧未だういしく、其句體見立秀句云掛等皆連歌の爲めの狂語鄙言也、門人誰彼連歌口傳の事等相應に知れる者はあれど、其言の葉は拙かりき、

京田舎言葉の花のいくめぐり 貞 徳
類ならば見とりにせばや柳髪 同

雪や玉面向不背不二の山

立 圃

阿蘭陀の文字の横飛天津雁

重 頼

持運ふとしや息杖けふの春

西 武

落にきと人に語らん嵯峨の鮎

梅 盛

女郎花たとへば阿波の内侍かな

季 吟

その中に安原貞室一人正風體をさぐり當てゝ、姿情の二つに心付けるにや

これはくとはかり花のよしの山

貞 室

あけぼのゝ寂慮静けし秋の山

同

後の月はみよしのゝ花や富士の雪

同

かゝる萬代不易の風雅多く世にあらはしけれと正風起るべき時運いまだ來らざるにや、其頃聞知れる人一人もなくてやみぬ、門人乾貞茹越前敦河の産、大津に住めり、

協明や衣かへうき大若衆

貞 茹

水草に生きた花飛ぶ螢かな

同

聞くもいやなる頑作なりある集に、

道端にいきれ立たる馬の糞

といふ句して、大津の馬の糞といふ名を得たり、かゝる弟子出来て正風

一代にて亡びぬ、(正風論)

芭蕉以後

芭蕉庵桃青は、伊賀の産、江戸に居して、俳諧に鳴る、桃青二十歌仙とい

ふ俳書をあらはす、(例略)

前後名を出したる撰集は二十歌仙一部なり、談林の時俳諧に長じ、日々

向上にすり上げ、終に談林を見破り、初めて正風體を見届け、躬恒貫之の

本情を探つて始めて、

道のべの木槿は馬に食はれたり

と申されたり、天下舉て俳諧中興の開祖、正風の翁と稱し侍る、天下の門

人數千人のうち、髓に正風の體を得たる者少し、初懷紙の頃杉風、嵐蘭、其

角、嵐雪、曾良等、江戸に在て隨仕す、(例略)

其頃故郷伊賀に、立歸りける道の記を、草枕とも野晒しの紀行ともい

ふ、大津千那、尙白、青亞三人師とし頼む、

辛崎の松は花より朧にて

此時の事なり、名古屋にて野水、荷苓、伊良古の杜國、冬の日の俳諧を撰し、

次の春春の日、うち續き曠野等の俳諧を勸む、風體、冬の日春の日は初懷

紙に近し、曠野は俳諧柔かにして少しかるし、(例略)

大垣如行、荆口等の門人、招きて師とし頼む、野晒の紀行の時なり、其後

奥の細道の時、大垣より伊勢遷宮拜みに別るゝとて、

蛤の二見へ別れ行く秋ぞ

又江戸に歸りて、諸門人に正風の體をすゝむ、又洛に上つて、去來、史邦、凡

兆等をすゝめ、

初時雨猿も小袈をほしげなり

と吟じて、猿袈を起す、(例略)

膳所曲翠、正秀、珍碩等を引導きて、ひさこの俳諧あり、大方趣猿蓑に等し、其後江戸に歸り、深川芭蕉庵を再び結ぶ、許六この時に見ゆ、珍碩江戸に来て、深川集の俳諧を撰す、(例略)

愚者が俳諧四五五年の後は、皆かやうに成ると申されけり、支考桃隣は隨仕して江戸に下り、桃隣は江戸に止り、支考は松島象潟の旅に赴き、葛の松原を撰す、野坡利牛孤屋をそゝのかして、炭俵出来たり、(例略)

又江戸にて保生沾圃をすゝめ、續猿蓑を手傳して、伊賀に歸る、(例略) 杉風、篋別に、別座敷と云俳諧あり、大概續猿蓑に同じ、俳諧は淺き砂川の流るゝ如くにせよとはいへり、(例略)

大阪珍碩を助け、元祿七戌の十月十二日、痢疾をうれひ、終に難波の旅店にて遷化す、體は義仲寺に葬る、僧丈艸、惟然前號、尼智月は乙州が母、園女は醫の一有が妻なり、猿蓑の頃より隨ひ、大阪之道後號、調竹、洛にて見ゆ、遷化の時、之道、舍羅、吞舟、心切に看病す、伊賀門人は故郷なれば、其數多し、加賀の北枝は、奥の細道の時、金澤より山中の湯まで見送り、萬子も早馬に

て追ひかけ、實の道を盡せり、名古屋の露川は東武下向の時、宮にて見ゆ、越中の浪化は、嵯峨の落柿舎にて參會あり、江東の李由も落柿舎にて見え、東武下向の時、四梅廬に漂泊し給ふ、木導、汝村は方違して、遂に逢はず、文通に、木導はかたの如くの作者なりと、度々賞美あり、路通、荷兮、野水、越人、木因等は、勘當の門人なり、其餘の門人は一々に記すに暇あらず、俳諧の風體は、續猿蓑に終る、其趣相續して、年月の變化を察し、時代の費を省くものは、今江東彦根の俳諧に極る、許六の自讃、其角が門人は、其角が手筋を残し、嵐雪が門人は、嵐雪が手筋を残す、如焦尾支考は、作あるものは、盡ると紛らかし、終に己が作意は盡きて、つれく讀と變ず、諸國の俳諧も、其所の宗匠の手筋となりて、桃青の血脈相續するものは、稀なり、

(歷代滑稽傳)

蓋聞、祖翁一度檀林に斧を入れて、正風の一路を開かれしより、草の風に靡くが如くなりしもうべなる哉、貞徳の古風になづまず、季吟をもとかず、無心所着の中より、俳の一線を引出して、蜘蛛の絲より細けれと、斷絶

する事なく俗談平話を取捨し、教を其機にまかせしが故なり、没後直傳の高足すらおのがじし百家九流に分れりて行く中に、晋子の豪邁なる、ひとり天下の俳諧を挫斷して、おほきに洒落の風をおこせしも、其末謎字の體に流れ入りて、聞人もいふものもとも、其落處を知らざるに至る、中頃芭蕉の風といふもの再び世に唱ふると雖、多く盤支考が手筋にして、風格くだりて、ひとへに野夫村童の雜談に異ならず、是を祖翁の風調にくらぶれば、氷と水晶との似て其物に非ざる事、莠の苗を見るが如し、其後曉台、關更、蕪村、青蘿、樗良、蓼太、白雄、續いて士朗、道彦、成美、乙二、等の世に指折られし人傑出て、漸く調正風に復古してより、連綿として今日益盛也、

(俳諧一覽集、卓郎の序)

翁遷化の後は去來丈草口をつぐめ、素堂大志あれど及ばず、其角嵐雪我が意地を立て蕉風に戻り、美濃風伊勢風盛なり、其後談々五色墨など點取風に成來りて、一旦蕉門すたれたるを、安永の頃より諸哲競ひ起りて正風にかへさむとす、されど蕉翁發起の時に同じく人心彩色の結構

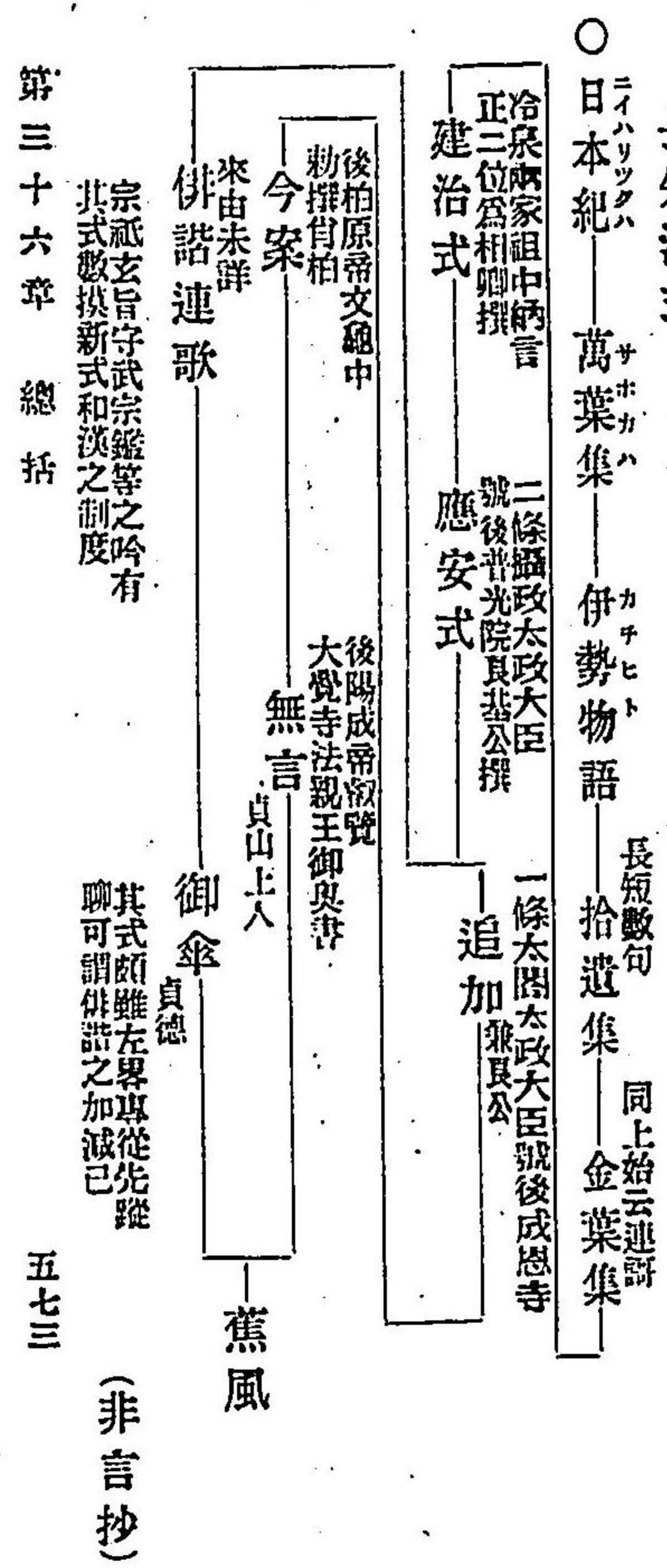
總括

ならでは寄りも付かねば、冬の日春の日などより導き、次第く正風を開く、天明寛政文化文政を経て、あら野猿蓑炭俵をうつし來る、され安永に冬の日を寫せと眞の冬の日にならず、文化に猿蓑を撰すといへど更に猿蓑にひとしからず、天保に炭俵をねらふといへど炭俵に同じからず、(麥慰舍隨筆、舍利風語)

第二項 法式の系統

連俳長短句法之由緒並法式濫觴之系 蕉門之法式因茲也如圖

長短法式



第三項 蕉風に關する著書

別座敷

子珊輯芭蕉の紫陽花や藪を小庭の別座敷を發句にしたる、子珊、杉風、桃隣、八桑の歌仙を卷頭に置き、其他歌仙及夏の句等を載せたり、元祿七年成、

俳諧一切經

芭蕉の七回忌(元祿十三年)に支考酒堂、北枝、露川等俳諧をなしたるを輯めたるもの、一冊、寫本、

正風論

元文五年上梓、洛狸々庵述、松阿寫、一冊本、

蕉門頭陀物語

涼袋の著、寶曆元年成る、蕉門諸俳士の逸話を潤色して述べたるものなり、

蕉門一夜口授

總

加賀の麥水の著、蕉風を問答體にして説きたるもの、安永二年、河内屋茂兵衛上梓、一冊、

蕉門俳諧語錄

安永三年上梓、上下二卷、蝶夢編、蕉門俳人の俳論を、發句之事、附句之事、等と項を分ちて列舉したるもの、有益の書なり、

續七部集

深川集、卯辰集、韻塞、砥並山、有磯海、小文庫、千鳥掛を合して小本二冊にしたるもの、諧仙堂板、安永三年十一月發刊、

俳諧世説

關更著、蕉門俳人の逸話を面白く書き列べたるもの、天明五年上梓、一冊、

桃青二十歌仙

曉臺編、蕉門俳人の獨吟歌仙を輯めたるもの、二冊、天明七年の序あり、芭蕉堂中所在三十六人肖像

括

第三十六章 總括
其角、嵐雪、許六等三十六人の像及び句を載す、像の寫者の名もあり、一冊、

五七六

芭蕉門古人眞蹟

義仲寺の沂風法師が、寺寶を寫して筑前の依分におくりしを、依分が上梓したるもの、二冊、彫刻鮮密、珍とするに足る、寛政元年己酉發行、

俳諧七部拾遺

初懷紙野ざらし紀行、尾張三歌仙、一橋桃の實、初便、其袋を合したるもの、上下二冊、享和二年九月菊舎太兵衛梓、

淺川早引集

宜麥の編七部集の中より、及句兄弟錦繡綴等の中より、手本となるべき附合及發句を撰みたるもの、享和三年刊行、

いろは集

文政六年六月、一柳園素徹編、蕉翁及び其角、去來、丈草、嵐蘭、許六、荷兮、野水、土芳、曲翠、杜國、杉風、北枝、惟然、曾良、正秀、卯七、越人、路通、凡兆等の句を

拔萃し、其他末弟或は他門の徒のは翁の許されしもの、み、を拔萃し、これ等を題目の頭字、花の句は、はの部の類によりていろは順に並べたる書なり、前後二集ありと序にいへど、予の見たるは前集四冊のみ、便利なる書なり、

新撰俳諧七部集

別座敷、三日月日記、三歌仙、六の花、續寒菊集、有也無也關、白砂人集等を載す、天保九年、橘屋治兵衛上梓、

蕉門諸生全傳

曰人が、諸國よりの來書によりて、蕉門俳人の傳をとめかきたるもの、書方亂雜なれども、他書に見えざること多し、頗る珍とするに足る、帝國圖書館に自筆本あり、

二翁四哲集

芭蕉、其角、嵐雪、去來、丈草の句を列舉し、頭註を施したるもの、惺庵西馬著二冊、安政三年、播摩屋勝五郎梓、

蕉風無格辨

蘇室久安述、慶應元年成、蕉風は空々寂々にして格式等なく、極めて自在なる旨を論じたり、引證明確、着實なる著なり、雪月花三冊、かれ野の卷、蕉風無格の卷、蕉風談の卷、同拾遺の卷、蕉風無格論の卷、同日記の卷と分ちたり、

俳諧名家選

杉風句集、丈草句集、惟然坊句集、鬼貫句選、を合して翻刻したるもの、尾崎紅葉編、明治二十九年十月、春陽堂より發行、

蕉門十哲集

俳諧文庫第九編なり、永機柳崖校訂、明治三十一年九月、博文館より發行、其角文集、續虛栗、類柑子、嵐雪文集、支考文集、許六文集、去來文集、伊勢紀行、去來抄、丈草文集、寢轉草、野坡俳文、野坡句集、越人俳文、不猫蛇、北枝俳文、北枝句集、杉風句集、冬かづら、を收む、

元祿六家俳句集

大塚甲山編、去來、丈草、惟然、凡兆、羽紅女、尙白、の句集を輯む、明治三十六年一月三十日、内外出版協會より發行、

元祿十家俳句集

大塚甲山編、去來、丈草、惟然、路通、北枝、牧童、凡兆、附羽紅女、尙白、洒堂、桃隣、の句集を輯む、明治三十六年六月、内外出版協會より發行、

明治三十七年十一月三十日
午前七時
脱稿の机に霜の旭かな
瓊音

明治三十八年五月十四日印刷
明治三十八年五月十八日發行

蕉風

定價金壹圓五拾錢

著者 沼波武夫

發行兼印刷者 金港堂書籍株式會社

東京市日本橋區本町三丁目十七番地

社長 原亮一郎

東京市下谷區龍泉寺町四百十四番地

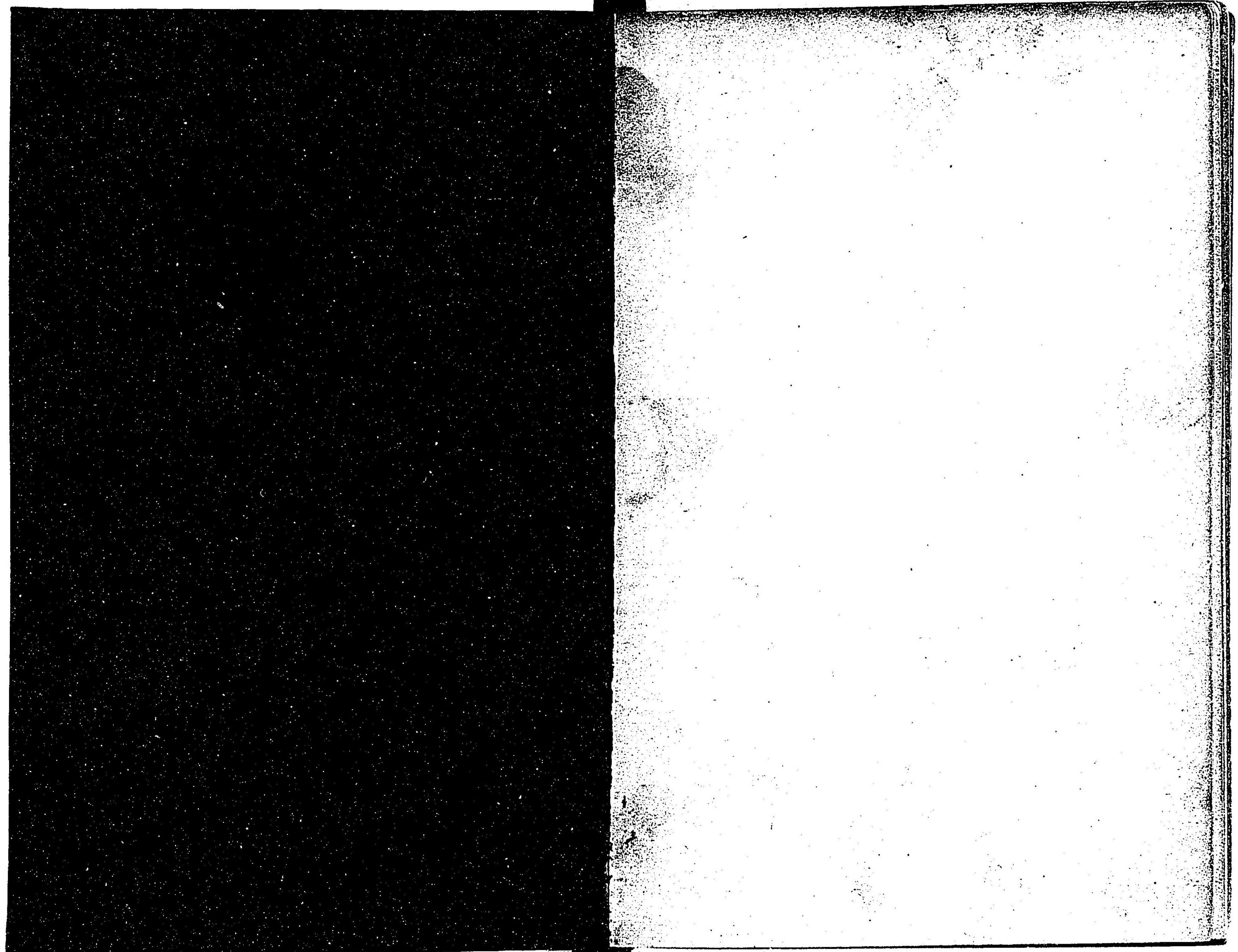
代表者 原亮一郎

印刷所 會社 東京國文社

東京市京橋區宗十郎町十五番地

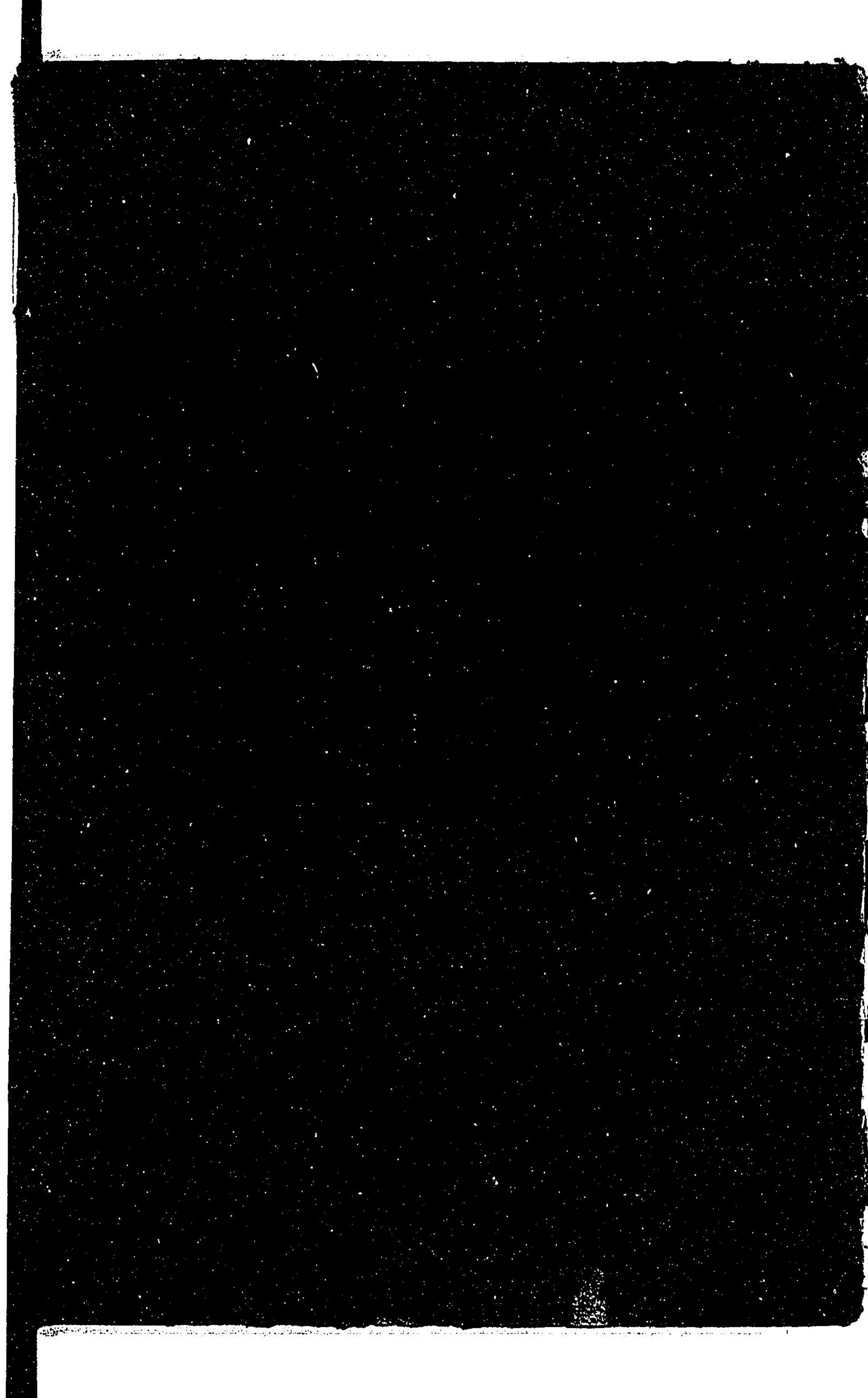
賣捌所 各府縣特約販賣所

不許製複



78
57

5



087111-000-3

78-57

蕉風

沼波 瓊音/著

M38

DBE-0286



